

# ガダマーとヘーゲル弁証法

——地平融合に着目して——

下山 千遥 (京都大学)

## *Gadamer und die Hegelschen Dialektik*

— Über die „Horizontverschmelzung“

Chiharu SHIMOYAMA

In diesem Aufsatz haben wir den Einfluß der Hegelschen Dialektik auf Gadamer untersucht und damit versucht, den Begriff „Horizontverschmelzung“ in Rücksicht auf die dialektische Funktion der „Sprache“ zu interpretieren.

Der Begriff „Horizontverschmelzung“, welcher sich in seinem Hauptwerk *Wahrheit und Methode*(1960) findet, wird zwar oft berührt, wenn vom Denken Gadamers die Rede ist. Aber es ist nicht leicht zu erklären, was er für ihn besagt. Um diesen Begriff einzuordnen, ist es nützlich, ihn von der „Struktur von Frage und Antwort“ aus auszulesen. Diese Struktur hat die Doppelbedeutung der platonischen *διαλεκτική* und der hegelschen Dialektik. In unserem Aufsatz wird die Letztere beachtet.

Allerdings wird in *Wahrheit und Methode* das dialektische Verhältnis zwischen Subjekt und Objekt bei Hegel verworfen. Aus Gadamers *Hegels Dialektik*, deren 1. Auflage 1970 erschien, ist aber zu entnehmen, daß Gadamer dasselbe Verhältnis nicht nur nicht für gleichgültig, sondern vielmehr für nützlich hält.

Wenn Gadamer sich mit Hegel auseinandersetzt, erwägt er ihn immer vermittelt durch Heidegger. Gadamer betrachtet Hegels Dialektik im Lichte von Heideggers eigener und durchaus kritischer Auffassung von Hegel. Gadamer steht in einem sehr komplexen Spannungsverhältnis zu Hegel sowie zu Heidegger, in welchem er sein eigenes Denken ausarbeitet und orientiert. In unserem Aufsatz können wir, erstens, dieses komplizierte Denksystem bei Gadamer und seinen Kontext bei Hegel und Heidegger ordnend darstellen und, zweitens, klar machen, inwiefern dieses System den Begriff "Horizontverschmelzung" bedingt.

**Schlüsselwörter:** Horizontverschmelzung, Gadamer, Sprache, Hegel, Hermeneutik

**キーワード:** 地平融合、ガダマー、言語、ヘーゲル、解釈学

## 1. 序<sup>1</sup>

本稿では、ガダマーの解釈学における中核概念である「地平融合 Horizontverschmelzung」の概念構築を辿る一つの緒として、ガダマーのヘーゲル解釈を扱う。ガダマー解釈学の体系、そして「地平融合」概念が構築されるに至るまでに、ガダマーが肯定・否定の緊張関係を抱き、多大な影響を受けたものの一つは、ヘーゲルの思想、とりわけその弁証法理論であった。本稿ではこのヘーゲル弁証法のガダマーによる読解を一つの軸として、「地平融合」概念に対する一つの解釈を提示する。この弁証法理論がガダマーの内部でどのように受容され、解釈され、また批判されることで、「地平融合」、またこれに密接に関係づけられる「解釈学的経験」や「先入見」概念が樹立されたのか。

ガダマーの高弟であり、解釈学にかんする多くの著作・論文を発表している Grondin は、ガダマーのヘーゲル解釈について次の評価を下している。その骨子を先んじて述べると、真理へと向かう弁証法の進行過程の無限性、そして真理と言語との密接な関わりという着想を、ガダマーはプラトン、ヘーゲルから地続きに受け継いでおり、そしてこのような弁証法受容はもっぱらハイデガー的だ、ということである (Grondin, 1994: 66)。しかし Grondin は、ヘーゲルとハイデガーおよびガダマーの分岐点が以下にあるという。

[...] ガダマーは思惟と精神が言語に依拠しているということを強調することで、自身をはっきりとヘーゲルから区別しているが、それに対してヘーゲルは逆のことを主張しているように見える。ヘーゲル形而上学の立つ観念論的立脚点が純粹思惟に尊厳を与えているが、その尊厳によってヘーゲルは思惟の遂行を言語のそれに依拠させることを不可能としている。ヘーゲルがアリストテレス的な仕方では思惟をノエシス・ノエセオース〔思惟の思惟〕として理解したことにはしたがえば、思惟は他ならず自己自身に依拠する。それゆえヘーゲルは、ハイデガーやガダマーが後に主題化したような言語の出来事的性格を正当とはみなさない。(Grondin, 1994: 66.)

思惟と精神について語る時、ガダマーにおいてそれは解釈学のうちの「理解 Verstehen」として扱われる (WM, 404 ff.)。理解の進行、その達成を表す「地平融合」は、本質的に言語的なものである。ガダマーの思想体系において「言語」のもつ思弁的機能を読み解くことは、避けては通れない重要な課題であるが、上記引用で Grondin はこれを〈自己自身に依拠する思惟を言語から分離する〉ヘーゲル v. s. 〈言語のもつ出来事的性格を重視し、思惟と言語をどこまでも接続させる〉ハイデガー・ガダマーという図式で捉えようとする。しかしこのような読解が、ガダマーのヘーゲル理解を十全に描きだしているといえるのであろうか。たしかにヘーゲルにおいては、意識に対し、「言語」は中心的役割を担わない。

<sup>1</sup> 本稿ではガダマーからの引用・参照を *Gesammelte Werke* から行う。『真理と方法 *Wahrheit und Methode*』、『ヘーゲルの弁証法 *Hegels Dialektik*』のそれぞれを WM, HD と略記し、引用・参照時には GW の頁数を示す。

またハイデガーからの引用・参照を *Gesamtausgabe* から行い、GA と略記した上で、巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で示す。

とはいえ、ガダマーとヘーゲルを結ぶ「言語」、弁証法の関係は、このような一面的な理解で済ませられるものではないのではないか。

これを踏まえ本稿では、第二節において、ガダマーの主著『真理と方法』における「地平融合」概念を確認する。この時、「解釈学的経験」や「先入見」、「作用史的意識」といったガダマーによる他の概念との関係にも触れる。というのもガダマーによれば、とりわけ「作用史的意識」の重要性を覆い隠してきたのがほかならぬヘーゲルだからである。加えて、ヘーゲルの「絶対知」「絶対精神」に対するガダマー解釈学のアンチテーゼを本稿第三節で確認する。

続く第三節から第四節において、WM 出版以後に公刊された論集『ヘーゲルの弁証法』を読解し、WM 内では見出されないその影響関係を取り出すことを試みる。第三節では、ガダマーとハイデガーの二者間でのヘーゲル読解の差異について論じ、第四節では、ヘーゲルに沿うことでハイデガーを乗り越えようとするガダマーを映し出す。またヘーゲルとハイデガーがどのように共通点を持ち、どのように差異を有するのか、そのガダマーの評価についても論述する。第三節、第四節の論述によって、われわれはガダマー解釈学における、ヘーゲル弁証法的性格がどのようなものであるかを確認することが可能となる。そして第五節において、これらの議論から導出されたものからどのように地平融合を捉えていくことができるのか、その一つの解釈を提示する。

## 2. 『真理と方法』から読み取れる「地平融合」概念とヘーゲル理解についての整理

本節では、まず本稿で主題的に扱われる「地平融合」概念の整理を行う。こののち、ヘーゲル弁証法についての WM 時点でのガダマーの理解を確認する。

「むしろ理解は、そうした、おそらくはそれ自体で存在しているであろう地平の、その融合という事象 Vorgang である」(WM, 311.) とガダマーが WM で述べている時に念頭に置かれていたのは、歴史的に隔てられた理解対象（歴史学者が対象とするような資料・テキスト）を理解するという場であった。自身と異なる地平を有しているように見える対象との「地平融合」へと至る過程は、段階をもって進行する。文化・慣習による文脈を含む「世界」に投げ込まれるわれわれは、理解に際して「先入見 Vorurteil」をもって臨む。先入見からなるわれわれの地平は、そのような地平からの完全な脱却や自己疎外を試みるのではなく、まさにその地平を基点とすることで、対象に向けて「問い」を投げかける。その問いに応答する形で、対象に対して何らかの「答え」を得る。これが理解の第一過程である。次に、その答えを受け取ることで、われわれの地平に揺らぎが起こる。揺らぎ、変容した地平から、再び理解対象に向けて「問い」が投げかけられる。これは先ほどと全く同質の問いではありえない。なぜなら、その問いを発しているわれわれの地平は第一過程が駆動する時点のものとは別様のものとなっているからである。「実際に、現在の地平は絶え間なく形成され続けている […]」(WM, 311.)。応答たる「答え」もまた、解釈対象はその字面

上で変化するものでなくとも、われわれには別様なものとして受け取られる(WM, 383ff.)。これが第二の過程であり、これが繰り返され積み重なることで、理解は進行していく。その進行によってついには、理解対象が背負うのはわれわれとは異なる地平であったのではないこと、われわれが行なっていたのは「一つの地平の形成」であったことに気付かされる。この事態を「地平融合」と指す。そして「地平融合」として記述できるような構造を持つ理解は、その対象が歴史的なものに限られるわけではない。異質性と親近性との間こそが解釈学の真なる場であるため(WM, 300.)、理解する対象となるもの全てにこの構造が当てはまるとガダマーは考える。そしてこのような構造でわれわれの地平、理解対象の地平の双方の変化が捉えられることを、ガダマーは「問いと答えの構造」と表現する。

この構造には二つの循環が備わっている。第一に、部分と全体の循環という、文献解釈の技法の集積としての学であった古来の解釈学から語り継がれているものがある。そして第二に、ハイデガーの先行把握や被投性概念を根源とする循環がある。ハイデガーの『存在と時間』第32節の解釈学的循環の議論をガダマーはWMでそのまま引用し、これを自身の解釈学の課題を説明する導入としている(WM, 270 f.)。

だが、上記の「地平融合」として映し出される理解の構造は、「存在の歴史の破壊」を目指すハイデガーにただ追従するのみでは、現れてはこないのではないか。「問い」と「答え」の構造は、もちろん問いと答えの「弁証法 Dialektik」とも表されるが、この弁証法をガダマーが描き出すのに大きく依拠する人物の一人がヘーゲルである(WM, 475.)。ここで本稿は、ガダマーにおけるヘーゲル読解の影響に着目する。ヘーゲルの弁証法概念をハイデガーを介して刷新することによって、ガダマーのうちで「地平融合」の構造が練り上げられたのではないか。これが本稿でのわれわれの見立てであり、以下でこの見立てがどの程度妥当であるか論証する。

ハイデガーの「解釈学的循環」を継承するガダマーにとって、ヘーゲルにおけるドイツ観念論的な〈近代性〉、すなわち、自己がそれぞれのもので設定され、対象を産出できるような自己(=絶対的精神)に到達できるという確信<sup>2</sup>は、もちろん看過しうるものではない。WMでのヘーゲルの言及をみると、たしかにガダマーは、その弁証法構造に着目し重要性を説いているが、その一方で、そこには必ず、反省哲学の中核的構造として抽出される、超越論的〈方法〉に対する批判が含まれている。

WMのうちで、ヘーゲルは以下のような仕方で登場する。WM第二部第II章第3節a「反省哲学の限界」で、ヘーゲルの弁証法への批判を行うことで、ガダマー解釈学における「作用史 Wirkungsgeschichte」概念を明確に特徴づけている(WM, 347ff.)。というのも、ヘーゲル弁証法が哲学史上にもたらした「歴史と真理との絶対的媒介」(WM, 347.)、強調はガダマーによる)としての「反省 Reflexion」の構造の影響が、シュライアーマッハー、ディルタイに至るまでの解釈学の歴史に通底している——そしてこれらの解釈学を乗り越えたもの

<sup>2</sup> このような意味で〈近代性〉と表したのは、以下のヘーゲルの記述に基づく。「このことが今や、普遍的な時代の、そして哲学の要求である。世界の中で新たな時代が生じたのだ。全ての疎遠な対象的存在が捨て去られ、それを最終的に絶対的精神として掴み、精神に対象的となったところのものを自己から産出し、その対象的となったものをそれに対して安らいつつもその力の中で保持すること、こうしたことを今や世界精神はなしうるように見える。」(Hegel, 1971: 460.)

としてガダマーは自身を位置付けている——とガダマーは捉えているためである。この「反省」構造によって打ち立てられた解釈学的前提を覆すものとして、作用史、また「作用史的意識 Wirkungsgeschichtliches Bewußtsein」は、地平融合の過程を説明する概念として登場させられるのである。

すべての個別的なものが絶対者のうちへと汎神論的に含み込まれているということ、このことがまさに〔シュライアーマッハーやディルタイが考えているような〕理解という奇跡を可能とするのである。(WM, 347.)

われわれにとって重要なことは、作用史的意識を次のような仕方では考えることである。すなわち、作用の意識において作品の直接性や卓越性が、単なる反省的现实へと再び解消されないというように考えること、したがって、反省の全能が限界づけられる (sich begrenzt) という現実性について考えることである。(WM, 348.)

限界を限界たらしめているものは、いやそれどころかつねに同時に、その限界によって局限されたもの (Eingegrenzte) が限界づけるところのものを取り囲んでいる。それが止揚することでもってのみ存在するのが、限界の弁証法である<sup>3</sup>。(WM, 348.)

ここでのガダマーの批判を端的に表すならば、超越論的「反省」による、「絶対精神」や全能性への到達可能性を否定することだといえるであろう。この批判のオルタナティブとして提出される「作用史」は、どこまでもその本質に有限性を含んでいる。よって、「理解」現象、「地平融合」、もしくは端的に「解釈学的経験」は、ヘーゲル的に考えられる絶対性とは原理的に接触不可能である。本稿第五節で詳述するが、「主観」と「対象」が無媒介となる統一の実現において、解釈学的経験はもはや存在しない。

ガダマーのヘーゲル理解は、「地平融合」概念にどのように影響しているのだろうか。これを探るため、本発表ではWM出版以後に公刊された論集『ヘーゲルの弁証法』を読解し、WM内では見出されないその影響関係を取り出すことを試みる。

### 3. ガダマーのヘーゲル読解とハイデガーのヘーゲル読解

拙論で論じたように、ガダマーは、アリストテレスおよびプラトンのフロネーシス φρόνησις 概念とディアレクティケー-διαλεκτική を「地平融合」に組み込んでいる (下山 2023a)。WMでは十分に示され得ないものの、ヘーゲルはこの〈古代ギリシャ〉の系譜をもつ者としてガダマーは理解している。そのことは、HD 第一論文「ヘーゲルと古代弁証法」(初出 1961 年)の表題からも明らかである。だがこの表題はまた、ハイデガーの『道標』に収録された「ヘーゲルと古代ギリシャ人」(初版 1958 年)をも喚起させる。この論考が

<sup>3</sup> 限界づけと追求される無限なものとの関係、すなわち有限性の自覚と無制約性の担保との関係については、例えば「哲学的倫理学の可能性について Über die Möglichkeit einer philosophischen Ethik」(1963)などの論文でも、ガダマーは同型の議論を展開している。この話題は下山 (2023b)においてより詳しく触れた。

ガダマーの60歳記念論集に寄稿されていることから、〈古代ギリシャ——ヘーゲル〉のつながりについてガダマーがハイデガーから多分に影響を受けたということは想像に難くない。実際に、ガダマーのヘーゲル理解はハイデガーのそれに依拠しているところが大きいことが本節においても展開されるが、しかし、それゆえに両者のヘーゲル理解の差異を示すことで、ガダマーのヘーゲル理解の独自性を示すことができるのである。

ガダマーとハイデガー、両者それぞれのヘーゲル理解において、ヘーゲルが古代弁証法、すなわちプラトンのディアレクティケーを最も正統に引き継いでいるという点は共通している。だが、二者の差異を最も端的に示すならば、ヘーゲルと〈近代性〉の関係、すなわち主観性（Subjektivität）を基体（subjectum）とすることに対するヘーゲルの態度への理解に存するのだといえるだろう。つまり、ハイデガーはヘーゲルに近代性を認めることに留まる。他方でガダマーもまた、上で見たようにこの点について批判的な視座をもつが、その上でヘーゲルに近代性を超えるものを認めようとする。両者の差異がなぜ生じたかをハイデガー・ガダマー各々の記述に即して論じよう。

ハイデガーは「ヘーゲルと古代ギリシア人」（1958年）において、ヘーゲルの弁証法を次のように説明する。

弁証法は絶対的主観の主観性の生産プロセスであり、そのものが「必然的行為」としてある。主観性の構造に従えば、その生産プロセスは三つの段階がある。第一に、主観は意識として無媒介的に客観へと関係づけられる。〔…〕〔第二に、〕再帰的關係づけ、すなわち反省によって初めて客観は主観にとっての客観として、主観はそれ自体にとって、すなわち客観に自らを関係づける主観として表象される。〔…〕客観つまり存在はたしかに反省によって主観と媒介されているが、しかしその媒介それ自体はまだこの主観にとっての主観の最も内的な運動としては表象されていない。〔第三に、〕客観の定立と主観の反定立が、必然的綜合において見出されてはじめて、客観と主観の関係づけという主観性の運動がその遂行において完成する。その遂行は定立から出発し、反定立へと進み、綜合の中へと超越し、その綜合に端を発して、定立された定立がそれ自体へと再帰することの遂行としてある。この遂行は主観性の展開された統一の中へと主観性の全体を凝集する。（GA IX, 430f.、強調はハイデガーによる。）

ここで肝要なのは、主観が客観を包含していくプロセスとしてハイデガーは弁証法を捉えているという点である。こうしたプロセスをハイデガーは容認せず、批判すべきものとしてみている。このようなハイデガーの態度は「〈ヒューマニズム〉についての書簡」（1946年）を参照するとより理解される。というのも、まさしくこうした主観のあり方が「存在者が存在から見捨てられている」という「故郷喪失」、「存在の忘却」だとされるからである（GA XI, 339.）。「人間がそこで存在を表象のなかで持つということを避けられ得ないから、存在も「最も一般的なもの」として、それゆえ存在者を包括するものとして、あるいは無限の存在者を創造するものとして、有限な主体が作ったものとしてしか説明されない」（Ebd.）。この前後でも語られるが、存在の「非覆蔵性」がヘーゲルには欠如している、というのがハイデガーの見解である（GA XI, 439ff.）。したがってハイデガーにとって、人間

は主観として客体ないし存在を産出するものではなく、「語りつつ、現前するものをその現前性において現存させしめ、その現存するものを聞き取る (vernehmen) 存在者」(GA XI, 442f.) である。

しかしガダマーは、こうした存在の我有化をヘーゲルに認めはしない。

要約すれば、ヘーゲルによる弁証法の本質を形成するのは次の三つの契機である。第一に、思惟は或るものを思惟自体にあって思惟することである。第二に、そのようなものとして、思惟そのものは矛盾する諸規定の必然的な共同思惟である。第三に、矛盾し合う諸規定の統一は、それらの諸規定がその統一のなかで互いに止揚しあう (sic[die Bestimmungen] in ihr sich aufheben) ということによって、本来的な自己となる。(HD, 16.)

ここで注目されるのは、弁証法においては「互いに止揚しあう」ということである。「それらの諸規定がその統一のなかで互いに止揚しあう」とき、互いが止揚しているのはそれぞれの規定それ自体である。弁証法が、一般に主観と客観の間で取り交わされるものなら、ガダマーの弁証法は、その諸規定が何らかの主観と何らかの客観をそれぞれ止揚するということの意味する。それゆえ、ハイデガーのように、主観が客観を主観性において取り込むのではなく、主観が主観として、客観が客観として相互に関係づけられるなかで定立されていく過程がガダマーのヘーゲル弁証法解釈であると言える。

こうした解釈は、ガダマーがヘーゲルの解釈を提示し、そのまとめを行う際によりはっきりと示される。

こうして、われわれの考察の円環が閉じられる。このことはまさに、ヘーゲルが自身の哲学的苦心を近代の状況に制約された仕方、古代人に課題を見出したとき、全くさかさまの課題を立てたように見えるのがポイントであった。いまや肝要なのは、固定された悟性の定立を「流動化させ、生气づける」ことである。それは、すべての積極的なもの、疎外されたもの、他なるものを、それ自体がそのもとにある精神という存在という、そのような郷土的なものなかと (in das Heimische des Beisichseins des Geistes) 解消することであり、その解消は哲学的証明の「再興」というヘーゲルの意図を動機づけた。(HD, 25.)

「故郷的なもの das Heimische」の導入のなされ方が、ハイデガーとは対照的であることがこの記述から読み取れる。ハイデガーは、ヘーゲルが客観、すなわち主観にとって「疎外されたもの、他なるもの」を、そのプロセスにおいて「主観として」回収するからこそ、ヘーゲルは「存在の忘却の歴史」に組み込まれるとした。それに対してガダマーは、客観がそのまま「故郷的なもの」に解消されることから、「近代の状況に制約された仕方」と留保付きだがヘーゲルを評価する。

また、古代ギリシャ人がそうした「故郷」に安らい、ヘーゲルはこれを「喪失」したというハイデガーの評価に対し、ガダマーの見解はある種の逆転を起こしている。つまり、ヘーゲルはある側面においては古代ギリシャ人よりも「ロゴス」へと接近していた、とガ

ダマーは考える<sup>4</sup>。「共同思惟」としての「ロゴス」への接近は、拙論（下山 2023a）でこれまで問題としてきた「事柄に即した前進 ein sachliches Fortschreiten」と言い改められている（HD, 21.）ことからわかるように、こうした弁証法による「ロゴス」ないし「事柄」の発見によってヘーゲルは、ガダマー解釈学の明確な先行者となるのである。

したがって、序において紹介した Grondin による、ヘーゲルとハイデガーおよびガダマーの分岐点についての評価は、ハイデガーにとっては正しくても、ガダマーにとっては不十分な規定であると言える。加えて次のことは Grondin の評価をより一層疑わしいものとする。ヘーゲルによる古代ギリシャ哲学解釈の不正確さを認める点では、ハイデガーとガダマーは軌を一としていると言える（HD, 20.; GA XI, 440.）。しかし、この不正確さゆえに、ハイデガーがヘーゲルを存在忘却へと接続したのとは逆に、ガダマーはヘーゲルの洞察をヘーゲル自身の思想において正当化し、「ヘーゲルはプラトンおよびアリストテレスを個々の点で誤解をしているにしろ、全体においては全く正しく理解しているのではないか？」という見立てをもつに至る（Ebd.）。

以上の議論を踏まえれば、ガダマーにとってヘーゲルは、簡単に論敵として切り落とせる相手ではないことが明らかとなる。

#### 4. ヘーゲルとハイデガー

前節において、ガダマーによるヘーゲル理解の多面性が明らかとなった。ガダマーがヘーゲルに対してもつこの微妙な態度をよりわかりやすくするためには、ガダマーがヘーゲル、そしてハイデガーの各々とどのように近づき、どのように分離しているのかを見定めることが効果的であると考えられる。この問題は、HD 第六論文「ヘーゲルとハイデガー」（初出 1971 年）において、〈ヘーゲルを読むハイデガー〉をガダマーが論じている姿から分析することが可能である。この論文でガダマーは、〈近代性〉を存在忘却と結びつけるためにヘーゲルを退けたハイデガーの解釈を介し、その上でハイデガーに反してヘーゲルをその〈近代性〉のもとで再び持ち上げる。

「ヘーゲルとハイデガー」では、ガダマーによる、ハイデガーからのある種の離反への試みがみられる。またこの試みは——ヘーゲルに対するマルクスがそうであったように——ハイデガーの価値を保存するという、ハイデガーに対する弁証法を行っている。つまり、ハイデガーがヘーゲルに対して退けた問題を復活させることによって、ガダマーはこれを遂行しようとするのである（HD, 89.）。まさに、ハイデガーとヘーゲルの「共同思惟」を見出すことで、両者の相互止揚を為そうとしているガダマーを、われわれはここに見出すこ

<sup>4</sup> ここまでの本稿の議論を踏まえて、先述の WM 内の小節「反省哲学の限界」の末尾の記述を見ると、かなり圧縮した形ではあるが、ガダマーが同様の事柄について記述しようとしていたことがわかる。「自己認識へと向けられた精神は疎遠なものとしての「実定的なもの」とは不和であるようにみえるが、精神が疎遠なものを自らに固有で故郷的なもの das Heimatliche として認識することで、その疎遠なものと和解する術を教示するに違いない。」（WM, 352.）。また、ここでは Heimatliche という語が使われているが、WM の序文においては heimisch という語を用いて同趣旨の議論を予告している（WM, 19.）。

とができる。

先述のように、「ヘーゲルとハイデガー」では、ヘーゲルの近代性はもはや積極的意味を持つようになる。

しかし、真なるものが、その生成から分離可能な結果であるのではなく、その生成と道の全体であり、それ以外ではないということが哲学的思考の弁証法的な自己関係性を形成するのではないだろうか？ たしかに、ヘーゲルの真理という理念に存する思惟の自己神格化から、それを否定し、ハイデガーと共に人間の現存在の時間性と有限性を対置する [...] ことで避けようとするのが、容易に思い起こされる。しかし、そのことによってヘーゲルを全く正当とみなせるかどうか問われている。ヘーゲルの教説がたつぷりと示し、われわれが最初に事例において演示した両義性は、最終的に積極的な意義を持つのである。この両義性は全体の概念とそこから最終的に帰結する存在の概念を全体的規定性ということから思惟することを許さないものである。(HD, 96.)

引用からもわかるように、ヘーゲルの思惟の自己神格化 (= 〈近代性〉)、すなわち主体と客体の弁証法的関係性は、単に退けてしまうべきものではないとされている。拙論 (下山 2023a) で示したように、ガダマーは単に人間の有限性と時間性——あるいは歴史性——のみを徹底して哲学を捉えるのではない。というのも、そうした有限性の徹底が全体の概念へと帰趨するという逆転が生じるからである。ここで、ヘーゲルによる思惟の自己神格化は、ハイデガーの思想との対置を経て、積極的な意味を孕んだ両義性へと帰着する。

このような洞察から、ハイデガーはヘーゲルに対する批判に自ら引き戻されてしまっているとガダマーは指摘する。「この現前性は言表されるべきである。すなわち現前性のまわりを、述語的に構造化された言表が、安らうことなき自己止揚において戯れ動く。これが弁証法である。ハイデガーは、言表としての言語へと向かっていったのではなく、われわれに語りかけることで与えられる現前それ自体の時間性へと向かっていったのだが、彼にとって、〈述べること〉(Sagen) は常に一層、全体において〈述べられうる〉(zu Sagende) ことに依拠すること (Sich-Halten-an) であり、〈述べられないこと〉(Unsagten) に対して自制すること (An-sich-Halten) である」(HD, 100.)。ガダマーの批判にひきつけて解釈されるこうしたハイデガーの思想では、〈述べること〉は〈述べられうる〉限りにおいて、それを〈述べること〉であるという。それゆえ、〈述べること〉はその全体によって規定され、また〈述べられないこと〉があることは、ハイデガーにおいては知られないままである。ここから次のことが言える。つまり、ハイデガーがヘーゲルに対して向けた「絶対的主観性」の一元論という批判は、転じて、存在一元論としてハイデガーに対してもさらに別の仕方に向けられうる。

さらに、ガダマーはハイデガーとヘーゲルから、それらを止揚することを試みる。この時注視されるのがまさに先の「両義性」の問題である。ガダマーはヘーゲルに次の点から「両義性」をみる。つまり、ヘーゲルが弁証法によって自然と歴史に対する理性の勝利を宣言する際、他己としての自然と歴史をともに自己としてしまうことで、自己そのものが

分裂する。そしてその分裂ゆえに理性が勝利したにもかかわらず、弁証法が継続する。この点は、先の引用でみられたハイデガーのあり方とは対比的である。上での引用の末尾にもあるように、ヘーゲルのこの両義性からガダマーは「全体の概念とそこから最終的に帰結する存在の概念を全体的規定性ということから思惟すること」(HD, 96.) ができないことを導き出す。このような道筋を辿って、ヘーゲルの弁証法は、常に他なるものを産出しつつ、自己の陶冶を行う、そして駆動しつづけるものとして、ガダマーの前に現れるようになる。

だがヘーゲル弁証法による他なるものの産出をこのような仕方で描くことは、ハイデガーの「存在の忘却」という契機なしには、すなわち〈ヘーゲル弁証法が自己自身を求め続けている〉ことの解明、指摘なしには叶わない。ハイデガーが「われわれに語りかけることで与えられる現前」を示すことで、その他なるものが存在することの記述にはじめて辿り着くのである。加えて、ヘーゲルのみにそって考えたならば、以下の問題に陥ってしまう。すなわち他なるものが産出され、それが存在するということが理性によってなされるならば、そもそもその過程は理性の範疇に留まる。このことこそが、ハイデガーの批判したことであったのは先に確認した。

問題は、この両者を止揚することである。この止揚は、〈述べられないこと〉が〈述べられないこと〉としてある、このことを〈述べること〉を可能にしているのは何かを問うことへと至る。そしてこれが、まさしく言語——これは理解される言語、地平融合へと至る言語である——とは何かを示す問いとなる。

秘匿だけが本質的に顕現と結びついているのではなく、秘匿することの本来的な、しかし秘匿されてはいる働き、すなわち〈存在〉をそれ自体のなかへと言語として守り隠す *bergen* という働きもまた、顕現と結び付けられているのである。

[...] むしろ、言語的な世界関係において語られることそれ自体が、われわれの世界内存在の言語体制によって初めて分節化される。語ることは、言語の全体に、すなわちそれによって語られているものが常に飛び越えられるところの対話の解釈学的潜性力に関係付けられる。  
(HD, 101.)

この前後では、ヘーゲルの『大論理学』第二卷第一文にある「存在の真理は本質である」という命題と、ハイデガーの『存在と時間』における「存在 *Sein*」——「本質 *Wesen*」——「現前 *Anwesen*」の関係との連続性を指摘しながら議論が展開されていく。

弁証法の構造を維持することで、他なるものは都度産出され、この運動は絶え間なく進行する。しかし、この向かう先は「全体」でも「全体を規定する自己」でも、ましてや「統一」でもない。言語を介してこの運動が進行するとき、言語は何かに向かうための手段として機能するのでなく、むしろわれわれは言語の語りかけに耳をすませるといふ仕方でこの運動に参加している。では一体、この「言語」を表す「言語」を、すなわち「語ること」を、われわれはいかに理解すべきであろうか。これを捉える一つの鍵が、対話、つまり「問いと答えの構造」がもつ、「解釈学的潜性力」となる。次節において、第二節で示した「地

「地平融合」概念の解読に沿って、この事態を理解していこう。

## 5. 地平融合とヘーゲル

第三節、第四節の議論を踏まえ、ガダマーのヘーゲル弁証法理解と重ねて、地平融合を解明しようとする以下ようになる。

まず第二節で行なった地平融合の説明の要点の一つを取り出すと、「地平融合」においてわれわれの地平、理解対象の地平の双方の変化が捉えられるが、双方の変化といえども、ここで考えられているのは、特に後者の変化については、主体の地平の変容による、その段階での主体が解釈していることによる、対象の変化だと考えられる。この事態をガダマーはWMにおいて「問いと答えの構造」として描出した。

この説明に対して、第三節、第四節での考察を経て、われわれは以下の注釈を付け足すことが可能となる。ここで解釈主体の地平として考えられているものは、ハイデガーとの止揚の結果として捉え返されたヘーゲル弁証法的構造における「主体」と対応させることができる。また、解釈対象の地平と上掲の構造のうちでの「客体」とを、また地平融合の動的過程とハイデガーによる批判を経た上で再構成されたヘーゲル弁証法ないし「共同思惟」とを、各々対応させて考えることができる。つまり、解釈主体の地平と解釈対象の地平は、各々が各々を可能としており、その規定によりたがいに定立している。それらは共同して止揚されるが、その止揚の運動が行われる場である「言語」の全体に関連づけられている。ここで注意すべき点は、この全体が規定されているものとしてあるのではなく、「語ること」によって他なるもののその都度の産出として、過去のそれを越えていくものとして考えられていることである。

ここでガダマーの想定する対話は、無限に続くものであるとされる。問いと答えの構造がついには解消され、対話をしていた相手・対象と統一され、一者となることは想定されていない。換言すれば、解釈主体が解釈対象をその全体において理解することも、主体が種々の理解の契機を何度も経ることで主体自身の全体へと至ることも、地平融合の営みにおいては訪れないのである。よって、地平融合は一度きりの大きな出来事として取り上げられるもののみを示すものではなく、大小様々な度合いで、理解の運動が進んでいるそれらの結果全てを、その過程を全て含めて表すものとして、捉えることができる。このような仕方、ガダマーにおけるヘーゲル弁証法の影響の分析から、「地平融合」のひとつの解釈を、本稿はいまや提出するに至った。

## 6. 結

本稿では、ガダマーにおけるヘーゲル弁証法の影響を考証し、これをもとに「地平融合」概念の内実について、「言語」の弁証法的機能に着目して一つの解釈の提示を試みた。ガダ

マーはヘーゲルと自身の関係を眼差すとき、常にハイデガーをその視界に収めていた。ガダマーはこれら二者とかなり複雑な緊張関係を有しながら自身の思想を練り上げ、また位置付けていたが、本稿ではこの入り組んだ状況を整理し、明晰に提示するに至った。

また第五節で提示した地平融合の解釈について、たとえば以下のように問うことができる。一なるものになることが目指されているのではなく、理解の対象や主観の全体を、主観によって把握することが目指されているのではないならば、地平融合の行先とは、個々人にとってその都度一義的な解釈へと辿り着いたとしても、その個人同士においては、各々の解釈の集積でしかないのだろうか。つまり相対主義的であるという批判から、原理的に逃れられないような概念でしかないのか。本稿においてこの核心的かつ重大な問いに応え切ることが叶わないが、以下のガダマーの記述を見ることでこの問いに対抗する一助を得たい。第四節で取り上げた第六論文「ヘーゲルとハイデガー」において、ガダマーはこのように論文を締めくくっている。

言語がなおそのように著しくこのような技術的関数（Funktion [機能]）に入り込もうとするなら、その関数は、言語と同様に、われわれの本性的なもの（Natürlichkeit）の定数を確定し、その定数は、関数において繰り返し言語に至る。その定数によって哲学の言語もまた、その定数が言語でありつづけるかぎり、対話のなかにありつづけるだろう。（f, 101.）

その直前で、近代科学的コミュニケーションの「情報理論」の浸透がわれわれに言語と思惟の結びつきをより喚起させる契機となることや、記号体系に言語が組み尽くされる可能性の否定について触れられていることから、ここでの「技術的」が何を示しているのかがわかる。つまり技術が発展し近代自然科学的な認識の受容が広くなされた現代社会、すなわち対象の統制・制御が主体たる人間によって可能となる、という、先述の〈近代性〉とも重なるような近代的人間理解と連続する語として用いられていることがわかる。

近代科学的図式における、人間と自然との主観 - 客観関係（ひいては主従関係）によってものごとく捉えられ、そのようにして言表される言葉が溢れるなかで、世界に対する解釈の多義性はますます強まり、その言述は大量に出力される。この大量の出力結果は、たんにわれわれを惑わせるだけではなく、それらに対して解析を行うことによって、そこに働く関数のもつてそれでもわれわれに常にかかわる「本性的なもの」の定数を探り当てるのが可能となる。本性的なものの身分は、上記の記述にある通り、定数として現れる限りは言語である。そして言語とは、理解しようとするわれわれと理解される対象との間での「問いと答えの構造」をもつた「対話」のうちで、場として常に生起するものであり、また「語ること」がその全体を常に改定し続ける。

この「本性的なもの」のガダマーによる含みをよりよく理解するには、もちろんガダマーによるプラトン／アリストテレス解釈を押さえなければならないが、本稿では上記二人をはじめとする古代ギリシア哲学について、主題的に扱うことができなかった。古代ギリシア人の継承者としてのヘーゲル像についても、ハイデガーとガダマーは多くを共有し、また差異を持つ。今後の展望としてこの点にも焦点を当て探究をすすめていきたい。

## 文献

- Gadamer, H. -G., *Wahrheit und Methode*(1960). *Gesammelte Werke*, Bd. I, Tübingen 1986.  
--Hegel und die antike Dialektik(1961). *Gesammelte Werke*, Bd. 3, Tübingen 1987.  
--Hegel und Heidegger(1971). *Gesammelte Werke*, Bd. 3, Tübingen 1987.  
Heidegger, Martin; Hegels Begriff der Erfahrung, in: *Holzwege. Gesamtausgabe*. Hrsg. v. Friedrich v. Hermann, Bd. 5, Frankfurt a. M. 1977, S. 115-208.  
--Die Frage nach der Technik, in: *Vorträge und Aufsätze. Gesamtausgabe*. Hrsg. v. Friedrich v. Hermann, Bd. 7, Frankfurt a. M. 2000, S. 5-36.  
--Brief über den Humanismus, in: *Wegmarken. Gesamtausgabe*. Hrsg. v. Friedrich v. Hermann, Bd. 9, Frankfurt a. M. 1976, S. 313-364.  
--Hegel und die Griechen, in: *Wegmarken. Gesamtausgabe*. Hrsg. v. Friedrich v. Hermann, Bd. 9, Frankfurt a. M. 1976, S. 427-444.
- Grondin, Jean; *Hermeneutische Wahrheit?: Zum Wahrheitsbegriff Hans-Georg Gadamer*. 2. verbesserte Auflage, Weinheim 1994.
- Pipin, Robert B.; Gadamer's Hegel, in: *Gadamer's Century: Essays in Honor of Hans-Georg Gadamer*. Hrsg. v. Jeff Malpas, Ulrich Arnsward u. Jens Kertscher, Cambridge/London 2002, S. 217-238.
- Hegel, Georg Wilhelm Friedrich; *Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie III. Werke*. Redaktion Eva Moldenhauer u. Karl Markus Michel, Bd. 20, Frankfurt a. M. 1971.
- 小平健太『ハンス＝ゲオルク・ガダマーの芸術哲学 —— 哲学的解釈学における言語性の問題』、晃洋書房、2020年。
- 下山千遥「ガダマーの解釈学における地平の歴史拘束性の徹底についての考察 —— R. ローティを導き手として」、『アルケー』(31)、関西哲学会、2023a、88-99頁。  
——「ガダマーにおける〈適用 - フロネーシス〉の関係性 —— 『真理と方法』前後の比較を通じて」、『人間存在論』(29)、京都大学大学院人間・環境学研究科『人間存在論』刊行会、2023b、79-89頁。